

# 「エピソード」の一例



# きっと、人生はエンターテイメントだ！

ライフ・イズ・エンタテインメント合同会社 社長 櫻井 徹 さん



ダメ上司の烙印を貼られていた男。  
ささやかな一言が、彼の心を変えた。  
新たなチャレンジへと導いてくれた。

いつもの焼鳥屋のカウンターで一人杯を重ねる櫻井の目から自然と涙がこぼれていた。なぜだか心がじんわりと温かかった。

「櫻井さんには感謝してます。お忙しい時でも全く嫌な顔しないで、仕事を教えてくださいましたから」

その朝に突如発表された寿退社の件で挨拶にきたHさんが明るい笑顔でそう言ってくれたとき、櫻井は不意を突かれて言葉が返せなかった。

「けど、すぐ無くなる仕事ですけどね」

何の嫌味もなく彼女はそう続け、微笑んだ。

直近に控えた新システム移行までの短期間だけのために、それまで櫻井が担っていたルーティン作業の一部を彼女に引継いだのは、ほんのひと月ほど前のことだった。それは彼女の言う通り、新システム稼働後は必要なくなる些細な仕事だった。

櫻井はS社の事務部門の「付課長」だ。山一証券や外資系企業での経験を買われて2年前に入社した際、彼は「課長」だっ

た。だが、会社にとって櫻井の仕事ぶりは期待外れで、最近では管理者にもかかわらず出社が定時ギリギリという日々が続き、ダメ課長のレッテルが貼られ部下たちからも総スカンを喰っていた。

だから今回、櫻井の降格が決まり今後は本社から新しく来る人間に入れ替わる、と聞いても誰も驚かなかつたし、櫻井自身がそれを当然のこととして受け入れていた。

S社のビジネスは【ある制度】の運営に係るもので、前職の経験は生かされたものの、櫻井にとっては全く未知の分野だった。

事務部門は総勢20名超で、課長職は櫻井を含め3名。その中で彼は最も若かった。彼はシステム部門と連携して顧客管理を行う女性中心の5名強のチームを担当していた。

「櫻井さんにはこのチームだけでなくウチの全プロセスも見てほしい。ここだけの話、他の課長たちが頼りなくてね」

赴任前、上司からそう耳打ちされたように、彼は当初、若手管理職として期待されていた。

頼りない、と言われた課長らは実際には実直な好人物たちで、決して非難される働きはしていなかった。しかし、彼らが頼りなく映るのも納得するほど、課の部下たちはみな格段に優秀だった。実際、櫻井は配属されてすぐ、そこに自分以上に課長の適任者が揃っていることを理解した。

日本企業にありがちな男性優位・過去のキャリア優先の人事のせいで彼女らは低位置に甘んじていたのだ。

だから、本来は虚心坦懐に業務に向かい、足りない面も含め自分をさらけ出して、優秀だが内心不満を溜めている部下たちからの信頼を仰ぐべきだった。

しかし、櫻井にはそんな人間力も業務に対する真摯な姿勢も欠けていた。当初示していた部下への鷹揚さはただの優柔不断と看破され、櫻井は次第に信頼と自信を失っていく・・・気づけば彼は頼りない課長陣の筆頭格になっていた。

そのうち、新システムの導入が決まり部内の多くがその導入プロジェクトに駆り出される中、彼は管理者というよりはルーティン業務のいち担当者にすぎなくなっていった。組織変更され社内の業務プロセスが改善されていく過程で、彼の居場所はどん

どなくなっていくた。

更に、人手不足の中、連日深夜まで残ってほぼ一人で作らざるを得なかった重要顧客向け書類にミスをしでかし、全社的な迷惑をかけた。

ところが、その期の櫻井への人事考課はなぜか「お咎めなし」だった。

しかし、上司が昇進移動し管理者責任の咎が及ばなくなった次の期、遡及してその過誤が問われた。更に、ずっと以前に発生した細かなミスや明らかに上司側に咎があった件でも裁断された。

明らかに人事考課としては行き過ぎたものだった。

焼鳥屋のカウンターで、連夜、やけ酒を煽った。

自分もプロジェクトに参加したかった。会社を支える力は自分にもあるはずだ、そんな憤りも有った。能力不足という決めつけも当初のボタンの掛け違いで生まれた社内の「関係性」のせいで、立場さえ変われば跳ね返せるはずだという思いもあった。

しかし会社も周りも誰もそうは見てくれなかった。

今朝のHさんの言葉は、そんな櫻井をささやかでも評価してくれる唯一の言葉だったのだ。

半年後、櫻井は別の上司とたった二人の特命業務に駆り出され、その上司のパワハラに逢いながらプロジェクトを進めていた。

モデレーターとして今後の業務を古業のチームを含むメンバーたちと進める会議でのことだった。

「有難うございます。では皆さんの意見を集約すると、こういうことですよね」

櫻井がホワイトボードに論旨をまとめて振り返ったとき、誰一人として自分を見ておらず、自分を除いた闊達な議論の輪が生まれていた。

「業務の趣旨は分かった。あとは自分たちでできるから、もういいよ」

そう宣言されたかのようにだった。

さすがにもう・・・無理だな

組織の中で一度定着した「関係性」は容易くは変えられなかった。自分はこの会社に居るべきではない。そう確信した。

S社に入る前、櫻井には別に候補先の分野が有った。それは【エンターテイメント・ファイナンス】だった。

まだ水物と思われていたその分野を諦めて【ある制度】の企業を選んだのは、自分が“やりたい”からというよりは、過去の職業経験が生かされると保守的に考えたからだった。

自分はエンターテイメントを目指そう。今の辛い境遇もささやかな喜びもすべてを糧にして「物語」を作る側に回ろう。

自分にはその能力が有るはずだ。

一なぜなら、自分はそれが本当に“やりたい”からだ

櫻井はそう強く思った。

(インタビュー・文章:とるじいや)

# 「特選インタビュー」の一例



# 特選インタビュー

ライフ・イズ・エンタテインメント合同会社 社長 櫻井 徹 さん

photo

挫折を含めた人生そのものが「物語」で、我々はクリエイターなんだ、ということですね。まさに「人生はエンターテインメントだ！」ですね？  
さすがに、赤面します・・・でも、その通りです！

“強い思い”を軸に人を繋げるウェブサイト『**あのときはないた**』を運営するライフ・イズ・エンタテインメント合同会社の櫻井社長は、20年ほど前に経営破たんした山一証券の出身だ。

- 櫻井社長は、あの山一証券のご出身なんですね？ あの経営破たんの際には相当にご苦労された方々も多かったと聞きます。社長の場合はいかがでしたか？

(櫻井) いや・・・実は、私は全く苦労してなくて。むしろ、あの破たんのおかげで優遇された立場でした。私は山一で投資信託の裏方という当時金融業界で引く手あまただった業務に携わっていましたから、山一の営業基盤を引き継いだメルルリンチ日本証券からは早くに声をかけられて、メルルで相当、良い立場で働かせていただきました。

むしろ、それで自身の立場に胡坐をかいてしまい、自ら成長を求めるようなことをやめてしまっていたんです。メルルの経営が下火になっても随分長くしがみついたんですが(笑)、結局、リストラに逢いました。

その後、これまでのキャリアを評価してくれたある金融機関に勤めたのですが、そこで、馬脚を現してしまいました。こいつ、全

く使えねえじゃねえかって(笑)

- 社長の**あのときはないた**エピソードでは、そのあたりのことを書いていらっしゃいますね？

(櫻井) はい。お恥ずかしい限りです、本当に。

結局、今思えば、私はせっかくの山一破たんの教訓を長い間活かせなかったんだと思います。

- 山一証券破たんの教訓、ですか？

(櫻井) はい。山一が破たんしたとき、世間は「あの山一が？」と驚きました。世の中に絶対に潰れない会社なんてないし、絶対安泰な仕事なんてない。だから人は組織なんかに隷属しないように、日々、自らを高めるよう努力すべきだ・・・偉そうに言うと、そういうことです。もっと言うと、それは若い人だけでなく、むしろ中高年にこそ言えることだと思うんです。

このところ、東芝や神戸製鋼、あるいはちょっと前のシャープなんかみても、ああいった企業には組織に隷属して日々悶々としている人たちが多いのではないか、と感じています。多くの日本の大企業で働く

方々が下を向いたり横向いたりしたままで、全く前に進めていないような気がするんです。

それは結局、日本という社会が20年前の山一破たんから何も学ばずに過ごしてきたツケなのではないでしょうか。企業文化とか組織の体質といったことではなく、その組織に居る一人一人が、自分を大切に自身を成長させていこう、という努力を怠ってきたツケのように感じます。すみません。偉そうなことを言って。

- 社長がおっしゃることはわかりますけど、組織で働くということはそういうことではないですか？ 自分がどうこうよりも組織の目標を完遂することが企業人には求められるわけですし。

(櫻井) 確かに、“きれいごと”かもしれないですね。ですが、私が言うのは仕事に限ったことではないんです。本来、人は“やりたいこと”や“強い思い”を軸に人生を切り開いていく宿命を負っているのだと思います。

仕事でそれを果たすことはできないかもしれませんが、でも、例えば定年退職後にその“やりたいこと”を実現するために準備して周りに働きかけるとか。なのに、未だに会社の仕事を卒業したとたんにつかり

“枯れて”しまう人が多いのはとても残念なことです。

リンダ・グラッドンという人が『LIFE SHIFT』という本で、人生100年時代がすでに始まっていて一生働き続けなければならない中で、人は自分にとって理想的な人生を追い求めていくことになる、と言っています。自分と向き合って個人として自分を見つめ、多様性に富むネットワークを構築して生きていくべきだと。

僭越ながら、ウェブサイト『あのときはないた』は、過去の“強い思い”を振り返っていただくことで皆さんが今後の人生を考え、ここを軸に人とつながって新たな未来を構築できる場になってもらいたい、と考えているんです。

- なるほど。「あの時は泣いたなあ」という“強い思い”のエピソードを開示することで、それに共感する人が繋がって、新たなコミュニティやビジネスを構築させたい、ということなんですね？

(櫻井) はい。さらには●●株式会社様などと連携し、転職したい方々の個人的な“強い思い”を企業様に届ける役割も果たそうと思っています。

こういったエピソードは普通は恥ずかしくてなかなか開示できないものです。一方、採用を考える企業様にとっては、人物を知るために非常に有用な情報になる、とも言えます。ですから、非開示にして希望する会社様にだけ見てもらえるようなシステムを構築しています。

また、私どもライフ・イズ・エンタテインメントは企業様のPRを受け持つ業務を行っております。SNSが発達する中で、マスメディアを通じた一方通行のPRだけでは効果が薄くなっています。むしろ、ネットを通じて口コミや共感の輪が広がることが企業PRでは非常に重要になってきています。

私どもの提供するPRは、必ずしも『あのときはないた』を絡ませたものだけではありません。ですが、例えば企業オーナー様の“強い思い”のエピソードがその企業や商品のPRに効果的である場合もあると思っています。大手メディアやネットメディアを通じたトータルなPRスキームと、その一つの方法としての“強い思い”のエピソードの活用、という幅広いサービスをご提供してまいります。

- よくわかりました。櫻井社長はメディアなどへのご対応もなさってこられたのですか？ そういった面でのご自身の強みなどお聞かせ願えますか？

(櫻井) 強み、とまで言えるかはわかりませんが…私はこれまで、映画を中心とした映画・エンタメビジネスの世界で「コンテンツファイナンス」の実現という目標を持って活動してまいりました。その経緯で、国内外の映画エンタメ関係やメディア関係など、様々な知見や人脈を構築しています。

「コンテンツファイナンス」というのは、映画などのコンテンツを製作するにあたり投資家から資金を集めるやり方の総称で、ハリウッドなんかでは金融側の人間がそう

いったお金を集めるエコシステムが出来上がっているんです。映画投資というのは海外では富裕層向け投資案件として定着しています。私は、日本でそれを実現すべく、長い間、色々な方々を巻き込んできました。

結局、現時点では私の目標に到達できていません。背景には日本の映画エンタメビジネスの構造問題や投資案件としての信用度の問題等々、複合的な理由がありますが…私個人のことを言うと、ひとえに自身の力量不足の問題だと思っています。

ですが、私は今でも「物語」の持つ力を信じて、「コンテンツファイナンス」の実現も目指しています。

この『あのときはないた』に投稿された誰かの“強い思い”のエピソードが人々に共感され、ゆくゆくは商業映画化などの道が開けたらいいな、などと夢想したりしています。私個人の夢は、映画プロデューサーなんです。

- ご自身で脚本や小説を書いておられるとか。受賞歴もお有りなんですか？

(櫻井) はい。自分が書いた脚本が2007年に角川が主催する「日本映画エンジェル大賞」を受賞しました。それ以降も何作も書いて、国内外の映画関係者や芸能関係者にアプローチして実現を目指してきました。残念ながらまだ日の目を見ていませんが…ですが、いずれは実現できると信じています。

私の目標は、「国内外に金融とエンタメを繋ぐクリエイティブ人になる」ということです。

クリエイティビティーを基軸にこれからも歩んでいくつもりです。

ただ、あくまでも我々の本分はウェブサイト『あのと きは ない た』のプラットフォームですので、それをおろそかにするつもりは有りません。

- 山一証券からあのと きは ない た挫折を経て、映画関係、ですか。なかなか波乱万丈ですね？

(櫻井) そう見えるかもしれませんが(笑)。ですが、私自身は「人生はエンターテイメントだ」という自身の“強い思い”を軸に、一步一步、歩き続けているだけなんです。

実は、最近はずっと、映画ビジネスを追いかける中で、むしろ金融業界に回帰していました。山一証券のOBにはプライベートバンカーやM&A業者などの富裕層ビジネスに関与されている方も多いのです。そういった方々にもお世話になって、山一出身に限らず広くご縁を広げてきました。

この『あのと きは ない た』のビジネス面でも、そういった方々の繋がりはとても役に立っています。

ですから、確かにいろんなことをしてきましたが・・・人生に無駄な経験などは無いんだなあ、と思いますね。

- なるほど。挫折を含めた人生そのものが「物語」で、我々は一人一人がそんな「物語」を紡いでいるクリエイターなんだ、ということですね。まさに「人生はエンターテイメントだ！」ですね？

(櫻井) さすがに、赤面しちゃいますよ・・・でも、その通りです！

そういえば、実は『あのと きは ない た』というのはバブルの頃に山一証券が出版していた企業広報誌のコラムから発想を得たんです。その広報誌では映画ビジネスについても書かれていたり、無名だけれど勢いが有る中堅企業の紹介をしていたり。あゝ種、企業PRの場でもあったんですね。何となく、そんなこんなが全てご縁で繋がっている気がしますね。何となく、ですけどね。

(インタビュー・文章:とるじいや)